

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都府中市美好町3-11-19
園名	トレジャーキッズぶばい保育園

1.活動のテーマ

<テーマ>

運動遊び



<テーマの設定理由>

- ・芝生の園庭や室内に広いスペースがあり、こどもたちがのびのびと体を動かせる環境が整っている。走る・跳ぶなどの多様な運動遊びを展開しやすい環境である。
- ・戸外遊びや体を動かすことを好むこどもが多い一方、体の動かし方が分からず遊びが広がりにくいこどもの姿も見られる。
- ・様々な体の動きを楽しみながら経験することで、体を動かす楽しさを感じるとともに運動能力の向上につなげていく機会が必要であると考え、本テーマを設定した。

2.活動スケジュール

- ・年間を通して数回、外部講師を招き、運動遊びについて学ぶ機会を設けた。
- ・講師から学んだことを基に日々の保育の中でも月に数回、運動遊びを取り入れながら継続して活動を行った。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・マット・鉄棒・平均台・跳び箱などの運動器具を用意し、園庭や保育室でサーキット遊びができるよう環境を整えた。こどもたちが様々な体の動きを経験できるよう、遊具の配置や組み合わせを工夫しながらサーキットを設定した。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・マットでは、クマ歩きをしてから、ウサギジャンプで進む
- ・鉄棒では、ツバメの体勢になり、自転車こぎ、足をグーパーに開くなどの動きを取り入れて展開していく
- ・平均台では、またいだまま座って進む、上を歩く、片足ずつ交互に昇り降りするなどの動きを行う
- ・こどもの様子に合わせて動きの内容を変化させていく
- ・動きに慣れてきたら、鉄棒の前回りやマットの前転、跳び箱を跳ぶなどの動きに発展させていく

<活動中のこどもの姿・声、こども同士や保育者との関わり>

・講師が来て初めて鉄棒や平均台を出した際は、恐る恐る取り組む子もいたが、時間が経つにつれて意欲的に遊び始める姿が見られた。講師からは、「できる・できない」ではなく「楽しい」という気持ちを大切にすること、また保育者は極力手を貸さず見守ることが大切であると助言を受けた。

そのため、保育者はこどもたちの遊びを見守りながら、できたことや挑戦する姿を認める声かけを行った。すると、こどもたちは「もう一回やりたい」「見ててね」と保育者や友だちに声をかけながら、自分の力でやってみようとする姿が見られるようになり、主体的に体を動かそうとする姿につながっていった。

また、講師がこどもたちの中から手本となる子を示すと、それを見て真似をして挑戦する子の姿も見られ、「できた！」と嬉しそうにする様子もあった。遊びはサーキット形式にし、休むことなく体を動かせるようにしたことで、こどもたちは十分に体を動かすことができ、笑顔も多く見られた。順番待ちで進みが滞る場面も見られたが、講師が体の動かし方を変えることを提案すると、こどもたちはその動きを取り入れながら楽しんで体を動かしていた。様々な動きを経験する中で、「楽しい」「またやりたい」など、体を動かすことの楽しさを感じている様子が見られた。

講師から学んだことは、その後、保育者が日々の遊びの中にも取り入れている。講師から教わったサーキットの形を参考にしながら、保育者がこどもたちの様子に合わせて新しいサーキットの形を考え、遊びの中で実践している。また、部屋の移動の際に「クマさん歩き」を取り入れるなど、日常の保育の中でも体を動かす機会を設けている。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・「できる・できない」という結果だけに目を向けるのではなく、「楽しい」という気持ちを大切にすることで、こどもたちが自分からやってみようとする姿につながることを改めて感じた。

・保育者がすぐに手を貸すのではなく見守ることで、こどもたちは自分の力で挑戦しようとし、できた時の喜びや達成感を感じている様子が見られた。

・友だちの姿を見て真似をしたり挑戦したりする姿が多く見られ、こども同士の関わりが意欲につながることを感じた。

・今回の活動を通して、こどもたちは様々な体の動かし方を経験し、身体を動かす楽しさを感じている様子が見られた。

・今後も、こどもたちが楽しみながら主体的に体を動かすことができるよう、今回学んだことを日々の保育に活かしていきたい。





とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都府中市美好町3-11-19
園名	トレジャーキッズぶばい保育園

1.活動のテーマ

<テーマ>

楽器遊び



<テーマの設定理由>

- ・月に2回実施している外部講師によるリトミック活動の経験を生かし、こどもたちが楽器に親しみながら様々な音を鳴らすことを楽しみ、自分なりのリズムや表現を見つけていく姿になると考え、このテーマを設定した。
- ・友だちと一緒に音を合わせたり、順番に音を出したりする経験を通して、みんなで遊ぶ楽しさや息を合わせる面白さを味わえると考えた。
- ・楽器遊びの中で、「強い音・弱い音」「速いリズム・遅いリズム」など音の違いに気づき、こどもたちが音やリズムへの興味を広げながら主体的に関わっていく姿を大切にしたいと考えた。

2.活動スケジュール

- ・リトミック講師の活動の中で、楽器の使い方や鳴らし方を知る。
- ・日常の保育の中で月に数回、楽器遊びを取り入れる。
- ・歌や手遊び、リズム遊びに合わせて楽器を使う経験を積み重ねる。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・鉄琴 ・タンバリン ・鈴 ・木琴 ・カスタネット ・マラカス ・ピアニカ ・トライアングルなど、様々な音色の楽器を用意した。
- こどもたちが自由に手に取りやすいように並べ、音を鳴らして試せる環境を整えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

リトミック講師による活動の中で楽器の使い方や鳴らし方を教えてもらい、クラス全員が同じ楽器を使ってリズム打ちを楽しんだり、好きな楽器を選んで音を鳴らしたりする活動を行った。講師は子どもたちが音を出すことを楽しんでいる姿を大切にしながら活動を進めた。

また、子どもたちの意見を取り入れながら楽器ごとにリズムを変えたり、子どもたちが楽しんで鳴らしている音に合わせて講師がピアノで簡単な曲を弾いたりすることで、音を重ねる楽しさを感じられるようにした。

年長児はピアノや鉄琴、木琴で音階を奏でる経験をし、全員での合奏へとつながった。どのクラスでも子どもたちは楽器遊びを楽しむ中で自然と友だちの音に耳を傾け、音を合わせながら合奏へと発展していった。

保育者もその経験を日々の保育の中に取り入れ、歌や手遊び、リズム遊びに合わせて子どもたちが音を出すことやリズムを感じることを楽しめるよう見守りながら関わった。また、子どもたちが出している音やリズムに合わせて保育者が歌を歌ったり簡単な伴奏を加えたりすることで、音を重ねる楽しさを感じられるようにした。年長児はピアノや鉄琴、木琴にも触れ、音階を奏でながら友だちと音を合わせる経験へと広がっていった。

<活動中のこどもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

子どもたちは「これをやりたい」と興味を持った楽器を自分で選び、手に取っていた。楽器を持つと、講師や保育者の姿をよく見ながら真似をして音を鳴らし、「こんな音がするよ」「いい音だね」と音をかめながら楽しむ姿が見られた。

音の出し方にもそれぞれの違いがあり、そっと優しく鳴らす子や、思い切り音を出して楽しむ子など、思い思いに音やリズムを楽しんでいた。「もう一回やってみたい」「一緒にやろう」と友だちに声をかけながら、同じリズムを試している姿も見られた。

保育者は子どもたちの音やリズムに合わせて歌を歌ったり、「いい音がするね」「みんなの音がそろってきたね」と声をかけたりしながら関わった。様々な音やリズムを楽しんでいるうちに、自然と音が重なりあい、いつの間にか合奏ようになっていく場面も見られた。音がそろった時には子どもたち同士で顔を見合わせて笑ったり、「できたね」「もう一回やろう」と喜び合ったりする姿があり、達成感を感じている様子が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・楽器遊びを通して、こどもたちは自分の興味をもとに楽器を選び、思い思いに音を鳴らすことを楽しんでいた。音の出し方やリズムにも一人ひとりの違いが見られ、こどもたちが自分なりに音や表現を楽しんでいる姿が見られた。

また、友だちの音に気付きながら音を合わせようとしたり、リズムを真似したりする姿も見られ、遊びの中で自然と周囲の音に耳を傾ける姿が育っていった。様々な音が重なり合い合奏のようになった場面では、こどもたち同士で喜びを共有する様子も見られ、みんなで音をつくり上げる楽しさや達成感を感じていることがうかがえた。

今回の活動を通して、こどもたちは楽器に触れる中で音やリズムへの興味を広げながら、友だちと一緒に楽しむ経験を重ねていた。こどもたちが自由に音を試したり表現したりできる環境を整えることの大切さを改めて感じた。今後もこどもたちの気付きや興味を大切にしながら、音やリズムに親しむ経験を日々の保育の中に取り入れ、こどもたちが主体的に表現する楽しさを感じられる環境を大切にしていきたい。



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都府中市美好町3-11-19
園名	トレジャーキッズぶばい保育園

1.活動のテーマ

<テーマ>

砂遊び



<テーマの設定理由>

こどもたちが日ごろから砂場で山を作ったり型抜きをしたりして遊ぶ姿が見られる。また、砂が湿っていることで砂の堅さや形の作りやすさが変化することにも気づき始めている。そこで、砂にふれながら様々な感触や変化を楽しみ、試したり工夫したりする経験につながるようこのテーマを設定した。

2.活動スケジュール

- ・こどもたちが日ごろから砂場で砂を料理に見立てたり、お店屋さんごっこを楽しんだりする姿が見られたことから、砂遊びの様子を観察する。
- ・砂遊びの中でカップや皿、バケツなどの道具を用意し、こどもたちが砂を料理や食べ物に見立てて遊べるよう環境を整える。
- ・砂場に大きな山を作ったりトンネルを作ったりするなど、工夫しながら遊びが広がる姿を大切にしている。
- ・こどもたちの気付きや発見を保育者が受け止めながら関わり、友だち同士のやり取りや遊びの広がりを見守る。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

砂遊びを楽しめるように、砂場にシャベルやスコップ、バケツ、トイを用意した。

また、砂を料理に見立てて遊べるようにカップや皿を準備し、ままごとキッチンやテーブルを設置して、ごっこ遊びが広がる環境を整えた。

さらに、葉っぱやドングリ、花などの自然物も取り入れ、こどもたちが料理の材料や飾りに見立てて遊べるようにした。

こどもたちが作った料理を並べたり、やり取りを楽しんだりできるようにすることで、お店屋さんごっこなどの遊びへと発展していくことを大切にしている。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

園庭の砂場で砂遊びを行い、子どもたちはシャベルやスコップを使って砂にふれながら思い思いに遊んだ。カップや皿を使って砂を料理に見立て、「ケーキできたよ」「ごはんどうぞ」と楽しむ姿が見られた。また、ままごとキッチンやテーブルを使いながら料理を作る様子を再現したり、友だちと「いらっしやいませ」「どのアイスにしますか？」と声をかけ合いながらお店屋さんごっこへと遊びを広げたりする姿も見られた。葉っぱやドングリ、花などの自然物を料理の材料や飾り委に見立てるなど、子どもたちなりの発想で遊びが広がっていった。さらに、トイを使って山やトンネルを作るなど、友だちと試しながら遊ぶ様子も見られた。保育者は子どもたちの気付きや発想に寄り添いながら関わり、遊びが広がるように見守った。

<活動中のこどもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

子どもたちは砂をカップや皿に入れながら「ケーキできたよ」「どうぞ食べてください」と料理に見立てて楽しんでいた。葉っぱやドングリ、花を飾りとして載せ、「チョコレートケーキできたよ」「お花の香りがするスイーツだよ」と想像を広げながら遊ぶ姿も見られた。また、「いらっしやいませ」「これください」と友だち同士でやり取りしながら、お店屋さんごっこを楽しむ姿も見られた。「ここはケーキ屋さんね」「私はドーナツ作るね」と役割を決めながら遊びを進めていた。トンネルを作る遊びでは、「もっと高い山にしてみよう」「手が届くかな～」とトンネルを重ねて高い山にしていったり、友だちと手をつないで開通したことに気づいたりする姿が見られた。友だちと一緒に「ここにつなげてみよう」「もっと砂を乗せてみよう」「白い砂をかけたら富士山みたいになるよ」と試しながら遊びを広げていった。砂の重みでトイが抜けなくなることに気付いた。保育者は「おいしそうな形のドーナツだね」「トンネルの中で手がつなげたね」など、子どもたちの気付きや発見に共感しながら声をかけ、遊びが広がるよう関わった。子どもたちは友だちと一緒に遊びを進めながら、発見や楽しさを共有する姿が見られた。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

砂遊びの中で子どもたちは、砂を料理や商品に見立てたり、山やトンネルを作ったりするなど、自分たちなりの発想を広げながら遊びを楽しんでいた。身近な教材である砂が、子どもたちの興味やイメージによって遊びが大きく発展していくことに改めて気づいた。また、友だちと「ここにつなげてみよう」「これどうぞ」など言葉を交わしながら遊びを進める姿が見られ、砂遊びを通して自然にやり取りや協力する関係が生まれていることを感じた。保育者として、子どもたちが自由に試したり発見したりできるように環境を整え、子どもたちの気付きや発想を受け止めながら関わることの大切さを改めて感じた。今後も子どもたちの興味や気づきを大切にしながら、素材に触れる遊びを通して主体的に遊びを広げられる環境づくりを心掛けていきたい。

